

クロソイ放流技術開発事業 (要 約)

涌坪 敏明・中西 廣義・川村 要・塩垣 優

本事業はクロソイ栽培漁業の推進を目指して、種苗生産、中間育成及び放流技術の開発を目的に平成2年度から取り組んでいるものである。当センターではこのうち、種苗生産及び中間育成技術の開発を担当している。放流技術の開発については、青森県水産試験場が担当している。

なお、詳細は「平成5年度放流技術開発事業報告書クロソイ班」（平成6年3月）宮城県、青森県、山形県、新潟県、福井県として報告済みである。

結果の概要

1. 種苗生産

平成5年度は早期の産出仔魚の確保を目的として、飼育水温の加温コントロールによる親魚養成を行った。

4月21日と4月26日に産出された仔魚76万尾を用いて、2回次の生産を行った。

飼育日数は51～56日間で、平均全長23.2～30.1mm、平均体重0.17～0.38gのクロソイ種苗を20万尾生産した。生残率は26.3%であった。

平成4年度の結果と比較すると、生残率が55.5%から26.3%に落ちたことと、また、餌料系列等の飼育管理は前年同様にいき、かつ、飼育開始が平成4年度より2週間早かったのにもかかわらず、成長が悪かったことが特徴であった。このため、魚卵・配合飼料の餌付け時期が昨年に比べ約10日遅れた。

親魚養成時における加温による早期産仔は可能であったが、その後の成長、歩留りの向上には結びつかなかった。今後の課題として歩留りの高い産仔魚確保のための親魚養成方法の検討があげられる。

2. 中間育成

例年と同様に深浦町北金ヶ沢及び協野沢村の2ヶ所で中間育成を行った。平成5年度には配合飼料の種類をマス用からマダイ用へ変えたところ、腹水等の症状もなく、成長も良好であった。

（深浦町北金ヶ沢）

種苗はすべて日本栽培漁業協会宮古事業場から搬入した。平成5年6月23日と25日にそれぞれ平均全長35.8mm、40.1mmサイズの稚魚4万尾ずつ合計8万尾を港内の網生簀に収容し、中間育成を行った。

中間育成により得られたすべての稚魚（平均全長83.7mm）に左腹鰭抜去の標識を施し、8月31日に北金ヶ沢地先へ52,225尾を放流した。生残率は65.3%であった。

（協野沢村）

日本栽培漁業協会宮古事業場から平成5年6月21日と28日にそれぞれ平均全長38.0mmと31.6mmサイズの稚魚8万尾ずつ計16万尾を、また、7月13日には当センター産稚魚平均全長45mmサイズ4万尾を協野沢村に各々搬入し、合計20万尾を海釣り公園前の網生簀に収容し、中間育成を行った。

放流は2回行った。9月20日には右腹鰭抜去した稚魚（平均全長87.0mm）66,382尾、10月19日には右腹鰭抜去をした上にアンカータグを付した稚魚（平均全長92.5mm）58,180尾を協野沢地先へ放流した。生残率は62.3%であった。

近年の中間育成技術では、生残率が6～7割見込める段階となっており、より一層の生残率の向上が今後の課題となっている。